

専門学校の栄光は永遠です



工学院大学専門学校

校長 大 勝 靖 一

私が校長に就任して以来早くも3年の歳月が過ぎました。その2年目に迎えた生徒を送り出す専門学校最後の正式な卒業式を3月23日に執り行いました。多くの学園の役職者の方たちも列席され、湿りがちになりそうな式を盛り上げてくださいました。心より感謝申し上げたいと思います。

アトリウムの演壇の背後には、本学の創始者の渡辺洪基先生の胸像があります。先生の見据える前での話にはいささか足のすくむ思いがしました。「私の創設した学校の伝統を引き継いだ専門学校がこれで終わる」、今までじっくりと拝見したことがなかった顔が「戸惑っているような」、「喜んでいるような」、「怒っているような」、「泣いているような」、いろいろな表情に感じられました。

そもそも4年をかけて人格と学問を教育する大学と2年で実学を教育する専門学校とでは教育内容も、教育方法も大きな違いがあります。「大学が専門学校の教育を引き継いでくれるのかな」と思えば、戸惑いを覚えます。「それを工学院大学ならやってくれる」と思えば、喜ぶでしょう。一方学園に対してではなく、このような矛盾をはらんだ、偏った社会に対して憤りを感じれば、泣きたくもなるでしょう。

私が専門学校を見ていると、時期は分かりませんが、いずれはこうなる社会情勢がそこまで来ていると感じてはいました。しかし、現実はそのような状況と違うように思えてなりません。専門学校を閉じるという背後にはもっと生々しい理由付けが見え隠れするからです。昨年より、河野常務理事の理解があって、生徒

の作成した作品を収録した「作品集」を作っています。ご覧になられましたでしょうか。専門のことを何も知らないで入学してきた生徒を1年半ほどで、このような作品を作り出すまでに能力を開発・教育し、身につけさせた教職員は、実践教育のプロ中のプロではないでしょうか。勿論退学していった生徒もいますが、自分でもやればできると感じ、はつらつと入社試験に挑戦し、97%に近い人が卒業とともに大学や社会へ向かって巣立って行きました。このような教職員の力量には頭の下がる思いがします。

私たちがこういう状況をよく見たり、専門学校の真の姿を熟視すると、渡辺先生はきっと「皆さんよくやってくれましたね」と言って喜ばれていらっしゃると思えます。更に先生のお喜びを確かなものとするためには、私たちが専門学校の培ってきた教育を理解し、今後の学園の発展に役立てようと努力する意欲を持つことも必要だと思っています。専門学校の栄光ある撤退は永遠です。

